

# 新規就農から考える、

## これからの農業

まつい

しゅうへい

(39歳)

北葛城郡広陵町



### 突然拓いた、農業への道

「自分が農業を仕事にするなんて、当時は全く考えたことがなかったです」。

大阪の高校に進学したのを機に、それ以降の生活の場はずっと大阪だったという松井秀平さん。高校を卒業後、建設業の仕事に就いた。勤務体系も仕事内容も厳しい業界で一生懸命に働き、30歳を過ぎたころには独立を実現できた。

そんな松井さんに人生の転機が訪れる。独立直後、世界を襲った不景気で、当時仕事をもらっていた建設会社が次々と倒産してしまったのだ。



「途方に暮れましたね。どうしたらいいのかわからず、でも立ち止まっているわけにもいかない。建設業界全体の下降も予見できていたので、転職を決めたんです」。

ちょうどそのころ、メディアでは農業がさかんに取り上げられていた。日本の食料自給率の低さ、農業人口の減少など、危機感を感じさせられる内容が多かった。

「実家では、祖父の代まで米作りをしていましたが、祖父が止めたあと、田んぼはすべて他人に任せきりになっていました。もともと、将来は実家の土地のことも考えないといけないと思っていたの

で、『それならいつそ』と農業の道に進むことを決めました」と、当時を振り返る。

元来行動派の松井さん。そうと決まればそこからの行動は実にスピーディだった。

### ひたすら真似る、から

#### 新しい挑戦へ

農業の経験が全くなかった松井さんが第一歩を踏み出したのは、新規就農を目指す研修生を受け入れる宇陀の農園での研修だった。

「すべてが初めてのことで、わからないことだらけでした。とにかく『ひたすら見て、真似て、学ぶ』でしたね。野菜の育て方はもちろん、たい肥の作り方、出荷の方法、作業に必要な道具など、何せ真似することから始めました。僕が今作っている水菜、小松菜、ホウレンソウを選んだのも、葉物野菜なら経験が少ない自分でも比較的育てやすいということを研



修中に知ったからです」。

研修の1年間と農園を始めた直後は、自分がどんな農業をしたいのか考える間もないほど、無我夢中のままに過ぎていった。農業を始めて4年を迎える今、自分のやりたいことが少しずつ見えてきた。

「化学肥料を一切使わず、自分で作るたい肥を使った有機栽培をしています。たい肥を混ぜたり、運んだりするのは体力が要るし本当に大変ですが、安心して食べてもらえる嘘のない野菜を作りたい」。

そのほかにも、どんどん新しいことにチャレンジしたいと考えている。最近新設したハウスでは、アスパラの生産を予定している。今は県内のアスパラの生産者の会合に参加するなど、目下勉強中だ。

### これからの

#### 新規就農を考える

「よく、後継者がいないという声を耳にしますが、実際はちょっと違うと思うんです」と松井さん。研修先の農園で、農業を志すたくさんさんの若い研修者に出会ったという。しかし、熱意のもとに研修に参加しても、実際に就農できる人はごくわずかだという事実を知った。

「僕は幸い、家に土地があったからスタートがスムーズだった。でも、農家でない



状態でも、やはり見ず知らずの人に大事な土地を任せるのは抵抗があるんですよ。その気持ちもわかります。でも、このままでは農業は続いていかない。意欲あふれる若い世代と、世話する人のいない土地が結ばれていく体制が必要だと思います」。

新規就農の厳しさを知る松井さんだからこそその言葉だ。

「研修先でお世話になった農園の方、地域の指導員さん、また交流が戻った地元の良い友人など、ここで農業をするようになってから、人と人のつながりをより強く意識するようになりました」。

これからも土を通してたくさんさんの出会いや出来事が生まれて行くのだろう。松井さんの農業の道は、まだまだ始まったばかりだ。



### 年中おいしい 奈良のホウレンソウ

ホウレンソウの生産は、ハウスでの周年栽培と、春と秋を主体とした露地栽培に大別される。冷涼な気候を好むため、気温が上がる夏場には全国的に出荷量が少なくなってしまうが、大和高原など、冷涼な気候の地域では夏でも栽培を続けることができ、質が良いことから評価が高い。

また、冬場の厳しい寒さの中でじっくりと育てる奈良県のホウレンソウは、葉が厚く、糖度も高い。「大和寒熟ほうれん草」の名で大和のこだわり野菜として認定され、注目を浴びている。

また、生産者や出荷組合では、包装に特別な鮮度保持フィルムを使用したり、保冷庫を利用したりして、食卓に届くまで鮮度と味を保持できるよう努めている。

